平成 27 年 3 月

「知の地域おこし」報告書

知の地域おこし推進員
和田佳津紗・宋多情

目次

１、 事業の背景

２、 事業内容

３、 成果及び課題

４、 今後の展開

５、 半年を終えて

６、 巻末資料

１、事業の背景

奄美市は、昭和 28 年の本土復帰後の奄美群島振興開発特別措置法に基づく事業の実施により、交通基盤や産業基盤・生活環境等の社会資本の整備が進み、生活水準も着実に向上するなど大きな成果を上げてきたところである。

また平成26年度には条件不利性の克服等を目的とする奄美群島振興交付金制度が創設され自立的発展の条件整備が進みつつある。

昨年度には「奄美群島成長戦略ビジョン」を策定し、同ビジョンの中で農業・観光・情報の 3 分野を主軸とした産業振興が図られているところである。

これら主要産業において、特に観光面について以下の要因から追い風が吹いている。

〇バニラ・エアの成田－奄美線の就航

〇奄美群島振興交付金による航空運賃の軽減

〇大型クルーズ船の寄港

〇世界自然遺産登録暫定リストへの掲載

特にバニラ・エアの就航により、若年者層の観光客が増えてきており、新たな需要を開拓しているところであり、今後、世界自然遺産登録をされた場合、大幅な観光客の増加が予想される。

今回、我々が応募した「知の地域おこし連携事業」においては、上述した奄美の現状からか、観光に関する２事業について公募があったところである。

募集№１　「伝統文化及び民泊体験を活用した観光メニュー創設」

募集№２　「住用地区における住民地域活性化組織の強化拡大」

同事業は、奄美市の重点分野である農業、観光/交流、情報、文化、定住など様々な課題や問題点に、学生ならではの行動力、柔軟性、企画力を生かし、地域おこしに取り組む事業である

具体的には、上記２事業のうち１事業を選択し、大学生の企画を大学生自身が「６か月間奄美で」実行する内容であった。

※参考「募集要項における学生のメリット」

〇長期の社会体験を通し、主体的に様々な活動に取り組むことで、受け身の姿勢や内向きの姿勢を脱し、学ぶ意義や明確な目標を発見することができる。

〇変化が激しく先が見えにくい時代の中、タフでグローバルな問題解決能力を身に着けることができる。

①募集要項

住用地区から出された募集要項は以下である。これに対し、一次審査では企画書とポンチ絵を提出した。

募集№2 「住用地区における住民地域活性化組織の強化拡大」
課題と解決に向けて取り組みたいこと

現状

キーワード:「世界自然遺産」※平成28年登録目指す
世界遺産登録は保護保全を目的とするが、一方でそれを目当てに観光客が増大する。登録先進地においては、住民(地域)と観光業の間に自然破壊や地元経済など新たな問題が生じている。奄美大島の自然保護コアゾーンにある奄美市住用町はこの事を見据え、H27に住民組織(NPO法人)を設立し"地域づくり"のために観光(集落歩きガイド等)を主とした地域活性化の活動を始めた。

課題

奄美は古い時代から近代に至るまで、中世の日本～琉球～薩摩と複雑な行政統治下にあったため、奄美の集落には様々な時代からの言い伝えや名所がある。しかしながら、そこに住む人々がきちんとした歴史的背景を把握していないため、観光客に対する「集落歩き(観光メニュー)」の際に、奄美(集落)と本土や沖縄を関連付けた歴史の紹介や、その中で成した奄美特有の文化を紹介する事ができない。

取り組みたいこと

奄美の歴史的背景を整理し、観光客でも楽しめ、共感し得る「集落歩き(観光メニュー)」の造成

②企画書（和田）

企　画　書

様式１

氏　名　和田佳津紗
大学名　鹿児島大学

募集No.２　「住用地区における住民地域活性化組織の強化拡大」

タイトル	「すみよいすみよう、あるこうよ」
①	ターゲット 地元：学生、主婦、おじいさん、おばあさん 観光客：地元の人との交流がしたい人
② フォント ＭＳ明朝 12 ポイント	奄美の歴史的背景を整理し、観光客でも楽しめ、共感し得る「集落歩きメニュー」を造成する。以下に提示するアイデアでは、観光客のための「集落歩きメニュー」を造成するのは地元の人々であり、その過程が地元の人の結束力を高める。そして「集落歩き」は地元の人だけのものではなく、「マップ」を介して観光客の人々も一緒に形に残していくものになる。 ～地元の人々の結束力や地元への愛着を高める～ 奄美の歴史的背景を学ぶ 「本や物に聞いてみる」 図書館や博物館などで奄美の歴史を学ぶ。チームを作り、歴史、文化、暮らしなどテーマを決めてそれぞれ学ぶ。「面白い！」「もっと知りたい！」と思ったポイントをまとめる。 歴史のこぼれ話を聞く 「人に聞いてみる」 ～おじいとおばあに聞いてみようプロジェクト（仮）～ 方法：聞き書きでじっくり 本や物などの資料で学んだ、「面白い！」などのポイント（歴史の「本当のところ」や名所にまつわる「言い伝え」など）について、知っている人に聞いてみる。 集落の文化を学ぶ 「一緒に歩いてみる」 住用における本や物や人から聞いた「面白い！」ポイントに関係する場所も含めて、実際に集落を歩き、生の集落の文化を学んだり、面白さを発見したりする。 方法：住用地区に住んでいる人と、住用以外の地区に住んでいる人と、様々な世代（おとしより、学生、主婦…）の人々が一緒に集落を歩く。 資料調査や聞き書きや集落歩きでまとめたものを形にする 「つなげる」「マップ作り」 奄美の歴史とこぼれ話と集落の文化を、照らし合わせてリンクする部分をつなげ、それを文章と図で形にしていく。既成の地図ではなく、魅力的なポイントを中心にした手づくりのマップを作る。「集落歩き」をするときに使う。

	▽集落歩きメニュー造成後 ～観光客と地元のつながりを形に残す～ 観光客も一緒につくる、集落歩き メニュー集落歩きの参加者が見つけた「いいね！」スポット・物・人の写真やスケッチ、コメントを共有してもらい、それがそのまま蓄積されていく観光パンフレットやマップを作る。 方法：集落歩きの拠点となる場所に大きな手作りマップをおいて、帰って来た参加者が書き込んでもらえるようにする。同時に、デジタル化して常に更新し続ける。 《効果》 　外から来た人がまとめるのではなく、地元の「自分たち」が作った「集落歩き」なら自慢できるし、なおかつ地元の人自身が地元集落を詳しく紹介でき、観光客を受け入れる準備（心づもり）ができる。プロジェクトを進めながら島内、島外に発信することで話題になり、住用の魅力を知ってもらえる。歴史を歩んで来たおじいさんやおばあさんが、若い人にそれを伝える機会ができる。 《裏目的》 　世代を越えた交流により、地元集落の歴史を知り、地元集落への愛着を高める。その結果生まれるものが集落歩きメニューである。集落について学ぶ、改めて知る、もっと好きになる。まずこの地元の基盤ができた上で観光客を受け入れる（もしくは同時に達成する）。住用がひとつのモデルケースとなる。
③	ターゲットへのアピールポイント 地元：住民参加型のプロジェクト。地元の人がさらに地元を好きになれる。 観光客：歴史的背景や文化を人々の交流を通して学ぶだけでなく、参加者自身がマップを介して＋αで住用の魅力を蓄積する一端となれる。

※作成要領

■タイトルはあなたが考えてください。

■②についての作成内容

・あなたが考える島唄や八月踊りといった伝統文化を活用した体験観光メニュー

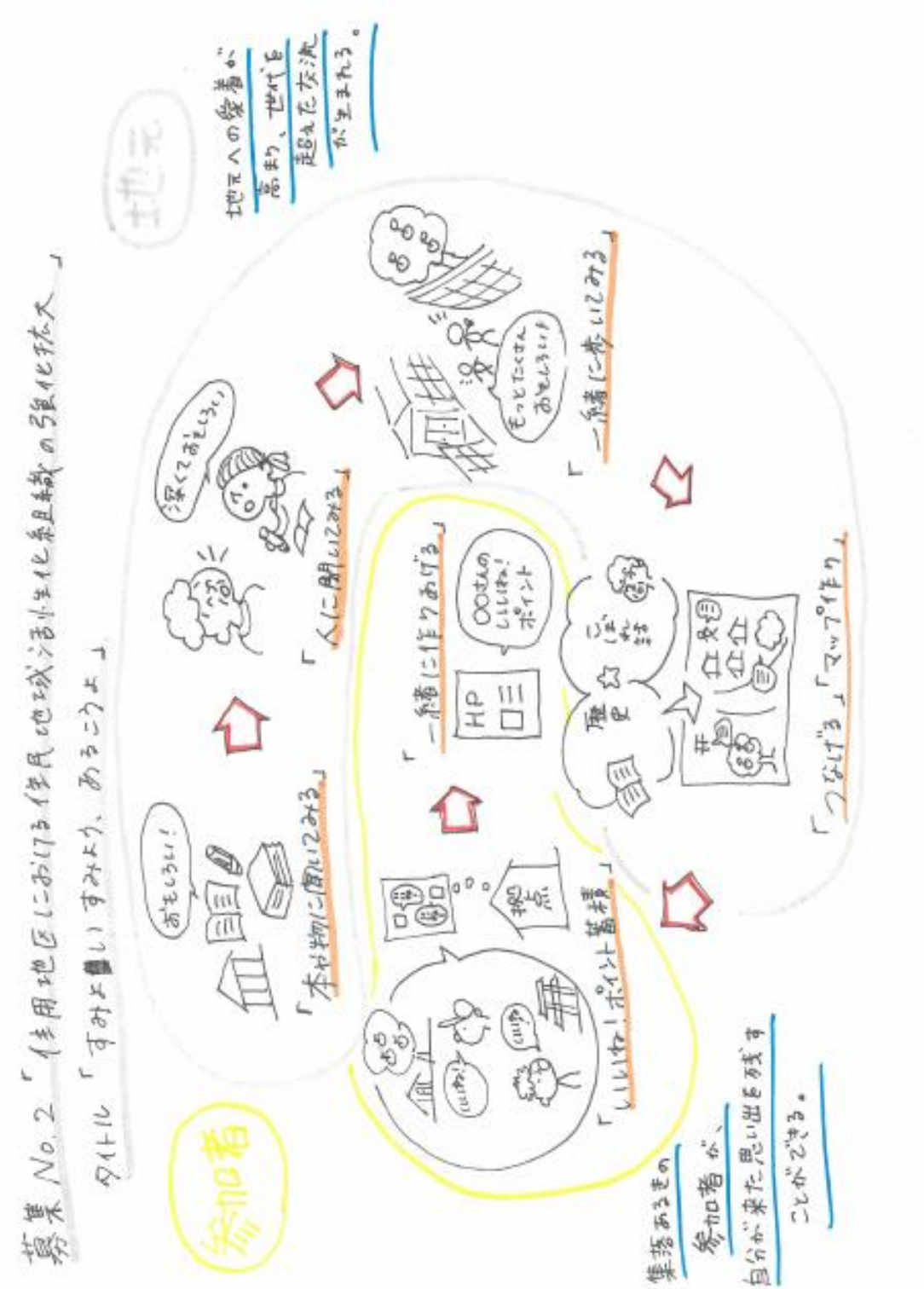
・地元の学校や地域の人たちと交流できる民泊などを活用した体験観光メニュー

・奄美の歴史的背景を整理し、観光客でも楽しめ、共感し得る「集落歩き（観光メニュー）」の造成

・自由意見

■その他添付資料あれば　Ａ４サイズ２枚以内でお願いします（ポンチ絵（イラストや図を使って概要をまとめた企画書）など）

ポンチ絵(和田)


募集No.2「住民地区における住民地域活性化組織の強化拡大」
タイトル「すみよいすみよう、あろうよ」
参加者
地元
おもしろい!
「本や物に触れてみる」
深くておもしろい
「人に聞いてみる」
「一緒に作りあげる」
HP
○○さんのいいね!ポイント
「いいね!ポイント募集」
「一緒に歩いてみる」
もっとたくさんおもしろい!
沒
「つなげる」「マップ作り」
地元への愛着が高まり、世代を超えた交流が生まれる。
集落あるもの参加者が、自分が来た思い出を残すことができる。

企画書（宋）

企　画　書

様式１

氏　名　　宋多情

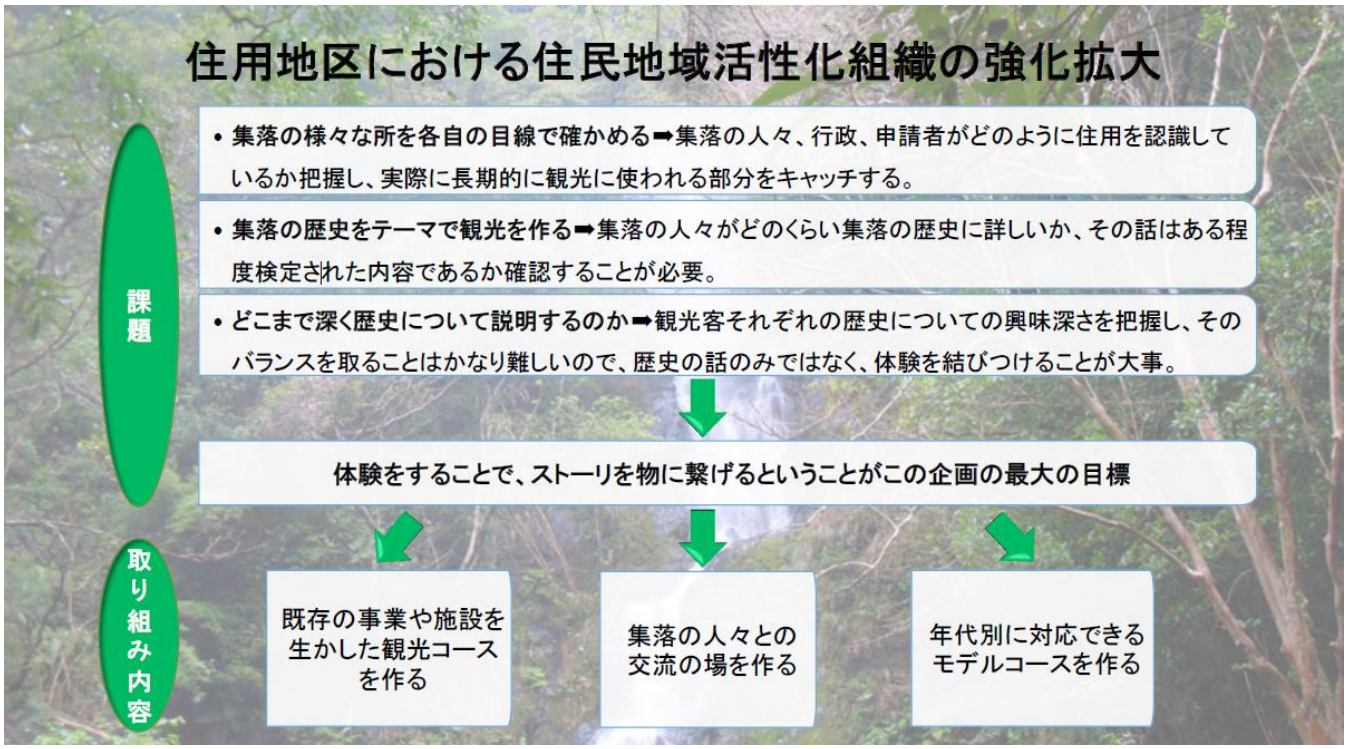
大学名　　鹿児島大学

募集 No2「住用地区における住民地域活性化組織の強化拡大」

タイトル：歴史も癒しもまるごと集落体験！	
① ターゲット	健康や美容に興味がある中年の女性グループ
② 内容	奄美の歴史は大きく、「奄美世」や「按司世」とよばれる日本の中世の時代、琉球王朝支配下の「那覇世」、近世薩摩藩の支配下の「大和世」、そして明治、大正、昭和、終戦直後の８年間の米軍占領期を経て、1953 年の本土復帰後から現在に至る。奄美世や按司世の時代には、平家の落人が大勢やってきたとされ、奄美群島各地に存在する平家伝説や平家ゆかりの神社もいくつか存在することから、この時代の影響は主として伝説という形で群島各地にその痕跡を残している。13 世紀半ばの 1266 年から 1609 年までは琉球王朝に服属した那覇世と言われ、この時代に琉球のノロやユタの文化や「間切り」といった琉球の行政上の区画が導入され、今日でもノロやユタの文化をはじめ、集落の構造（カミミチやアシャゲやトネヤといったノロ祭祀と関連するものや土俵など）にその痕跡が色濃く残っている。薩摩に服属した 1609 年から明治までは大和世と言われ、代官制度やサトウキビの強制栽培制度などが導入されたが、薩摩の影響を最小限にとどめる政策が行われた結果、琉球的な奄美の文化が温存された。また、薩摩の圧政が、裏声を使った独特の悲哀に満ちた島唄の悲話を生んだともいわれる。また、この時代、奄美の妖怪であるケンムンが『南島雑話』で初めて紹介されている。 現在まで、南の島というタイトルは沖縄の方が持っており、奄美は観光地としての認知度も低かった。しかし、「奄美・琉球」という名で世界自然遺産登録になると、今まで沖縄の影に隠れていた奄美の関心が高まることが予想される。このため、今、世界自然遺産登録後の観光への影響をにらんで、行政主導で観光化に向けた様々な制度設計や整備が行われている。奄美は世界自然遺産の本質である自然保護と共に、その豊かな自然を資源として活用することを考えて、すでに様々な取組が始まっている。 集落歩き（観光メニュー）を作るにあって、最初に取り組みたいことは、外国人である申請者の新鮮な目で集落の様々な名所の確認作業である。次に、集落の人々が集落の歴史を奄美の歴史との関連でどこまで認識しているのか確認していきたい。また、様々な年代や関心、性別等といった観光客の多様性に応じて、歴史の話のみではなく、体験型、ストーリ型のメニューを作ることがこの企画の最大の目標である。具体的には以下のような方針で集落歩きの観光メニューを作成していきたい。 １．住用だけでも 30 前後も準備されているシマ博覧会へのエントリー内

	容や住用町の 6 つほどある観光関連施設などを生かして集落歩きのモデルコースを作る。 ２．お茶やランチをコースに入れて集落の人たちとの交流の場を作る。そこで、集落にまつわる様々な話（歴史、ケンムン、災害、その他）や田舎暮らしについて語る場とする。 ３．年代別のモデルコースを考える。 １）若い世代には体験コースとして「スタンプラリー」を提案する。例えば、川内集落を中心に観光をするとしたら、タンギョの滝・フナンギョの滝など川内の観光スポットを集落の人がガイドとして案内する→川内集落を歩き、集落の人々と触れ合う（お茶会）→サン奄美で地元の食材を使ったランチ→木工工芸センターで貝のアクセサリー作りなどの体験。スタンプラリーでスタンプを何個以上押すと、商品がもらえるようなものを取り込むと、商品の PR にもなるし、また、特産品の販売促進にも繋がる。 ２）中年以上の世代に対しては、「食、癒し」を中心に、交流的なもの、地元に人たちとの会話の場を持てるようなものにする（村のくらし、田舎暮らし、スローフード、スローライフといったものの良さを伝えられるような場にする。） ＜集落歩き観光メニューの一例：川内集落歩き＞ 公民館に集合（集落を歩きながら地元のガイドが説明をする。川内集落について、住用町で一番古い集落、かつては「ノロ」と呼ばれる女性祀祭者が重要な機能を果たしていたが、昭和 30 年頃にその組織は解散した。）➡水車小屋跡と製糖工場跡（明治から大正にかけて「ヤドリ」と呼ばれた水車小屋があった川沿いの場所。）➡製糖工場跡（いくつかのヤドリが昭和 36 年に合併してノロの祭祀場があった前川地区の広場に中型の製糖工場が建設された。川内川を丸木舟で仲買人が砂糖の買い付けに来ていた。）➡製材工場（大正 6 年に島種久地区に黒糖用のクレイタ専門の製材工場ができた。後に、枕木専門の製材工場が牛屋川付近にできた。）➡フナンギョの滝（船木を切りに行くということに由来。昭和 10 年頃、朝鮮商工という会社が製材工場を経営。大正 10 年頃まで、豊勝の高儀野山約 50ha を所有し、杉の造林をしていたが、岩崎産業に時価 500 円で売却した。昭和 30 年頃まで毎年松の造林を行っていた。）➡紬工場（昭和 30 年頃まで林紡績工場と里村家に 2 軒の織物組合があった。）➡公民館（集落の人たちとお茶。田舎暮らしの話、妖怪ケンムンの話などをする。）➡サン奄美（昼食を食べ、おみやげを買う。）➡体験交流館（薬草石けん作り体験など。）➡解散
③ターゲットへのアピールポイント	健康や美容に興味がある中年の女性たちに、長寿の島である奄美の人々の普段の生活を集落歩き観光を通して感じさせる。集落歩きの主な内容は歴史の話だけではなく、集落の人々との交流を中心にしたい。川内集落で取った薬草やハーブのお茶を飲みながら健康を保つ田舎の知恵について語らう。サン奄美では、地元の食材を利用した健康食を食べ、体験交流館では集落で取ったハーブを利用した薬草絞りや、石けん作りなどを体験することで、より健康や美容に力を入れる。

ポンチ絵（宋）


住用地区における住民地域活性化組織の強化拡大
課題
• 集落の様々な所を各自の目線で確かめる➡集落の人々、行政、申請者がどのように住用を認識しているか把握し、実際に長期的に観光に使われる部分をキャッチする。
• 集落の歴史をテーマで観光を作る➡集落の人々がどのくらい集落の歴史に詳しいか、その話はある程度検定された内容であるか確認することが必要。
• どこまで深く歴史について説明するのか➡観光客それぞれの歴史についての興味深さを把握し、そのバランスを取ることはかなり難しいので、歴史の話のみではなく、体験を結びつけることが大事。
体験をすることで、ストーリを物に繋げるということがこの企画の最大の目標
取り組み内容
既存の事業や施設を生かした観光コースを作る
集落の人々との交流の場を作る
年代別に対応できるモデルコースを作る

住用町
名瀬市
東城
川内集落
水車小屋
ノロ祭祀場
岩崎産業
奄美交流会館
サン奄美
フナンギョの滝

２、事業内容

１）具体的な取り組み

最終的な目標「集落歩きメニューの造成と持続可能な観光体制づくり」のため、

①聞き取り・文献調査により集落の歴史・文化をまとめる。

②また、調査した地域の魅力や観光資源を活かし、集落歩きを含む観光プログラムを造成・実施する。

２）取り組む範囲と方法

地域リーダーがおり、既に調査や魅力発掘が進められている「見里」・「西仲間」・「市」の三集落が主な取り組みの範囲となった。①の集落調査に関しては、区長やヤムラランド役員や地域のリーダーと協力し、「知の地域おこし推進員」が中心に聞き取りや集落歩きによる調査を行った。②の観光プログラムに関しては、「あまみシマ博覧会」やこれまでヤムラランドが行ってきたツアーを参考に、調査でわかった観光資源を活かした新しい企画をヤムラランド会員とともに実施した。その際、観光担当の市職員（知の地域おこし推進員世話人）やヤムラランド事務局、アドバイザーに相談をしながら作業を進めた。

３）スケジュール

10月	11月	12月
現状把握	文献調査	見里集落調査
具体的な目標の設定	西仲間・市集落調査	パンフレット分析
スケジュールの設定	ヤムラランド活動促進企画	マップの作成

1月	2月	3月
モニターツアー企画	モニターツアー実施	集落マップの完成
	追加聞き取り調査	報告書作成

４）作業体制

宋・和田共に企画案があったが、現状を把握した上で取り組むべき内容を改めて決定し、それぞれの得意分野を活かしながら同じ目標に向かって作業を進めていった。今回が事業の第一回目ということで、知の地域おこし推進員の立ち位置や進め方についてなど、時間を作ってもらい何度か相談した。また、ほぼ月に一回のペースで関係者の前で報告を行ない、作業を振り返りつつアドバイスを頂いた。

話し合いや報告会の内容や日付などを以下に示す。

	日付	メンバー	内容
話し合い	（必要なときに）		
一回目	10/23	和田、宋、 福長・中村（世話人）	「知の地域おこし」の立ち位置についてなど
	12/3	和田、宋、福長・中村（世話人）、 桑野（ヤムラランド事務局）、 和田（ヤムラランド理事長）	ヤムラランドの事業についての共有、「知の地域おこし」でやるべきことについて、役割分担等
報告会	（月例）		
第一回	11/4	尾池、和田、宋（知の地域おこし推進員）、東、清、大谷（企画調整課）、菊田、新元・福長・中村（世話人）、山下・原（アドバイザー）、他	これまでやった内容の報告、これからやる計画の報告、それに対するコメントやアドバイス
第二回	12/22		
中間	2/6		
最終	3/30		

また、事業に取り組む際、他集落・他自治体においてもこうした活動がスムーズに行なえるような方法論の確立を目指し、作業過程を記録した。以下、私たちが半年間で行なった作業の基本的な流れと成果を示す。月別の作業の記録は巻末に示す。[1]

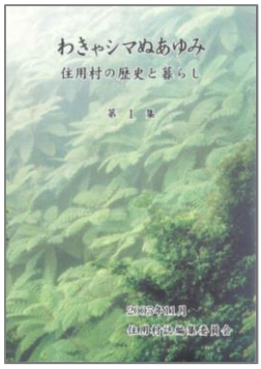
[1]月別作業記録

３、事業の成果及び課題

①	資料･情報収集(1～2 か月)
作業	奄美の歴史や文化に関する書籍、南島雑話、村誌、大学の人類学系の調査報告書など、図書館や役場にある資料を収集する。奄美についての基礎知識を（完璧でなくても）ひととおり理解し、その集落において調査の参考になる部分や関係のありそうな部分をピックアップする。一番実用的なのは、集落歩きをする際の案内を想定し、それに必要な説明の情報量や根拠をその資料を参考に調べることだ。
成果	集落に関する資料のリストを作成した。集落で詳しい方から、様々な地元の資料を貸して頂いたり参考になる文献を紹介して頂いたりした。※２：資料リスト
課題	奄美の歴史や文化についての網羅的な知識を身に着けるのは長い年月を要する。基礎知識については実地調査をしながらでないと理解が難しい部分もある。さらに集落ごとに文化の多様性や辿った歴史も異なるため、最初のうちは文献の内容と異なっていることで混乱しやすい。他の集落でこの作業を行う際、集落史のようなものを作るというわけでなければ資料収集やリストアップまでは中々やる人がいない。もし勉強会を開いたりイベントの準備をしたりする際は「集落歩き用のマップを作る」「集落の魅力を探す」「集落の伝統文化の変遷をまとめる」「集落の年中行事についてまとめる」など、適切な範囲のテーマ決めや目標、アドバイスがあると良い。

※特に参考になった資料を紹介する。

『わきゃシマぬあゆみ住用村の歴史と暮らし』第 1 集 [住用村誌編集委員会 2005]

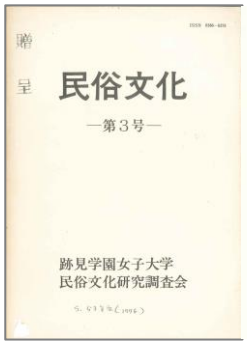


対象範囲：住用全体　特徴：村誌
使用方法：聞き取り前の事前調査に適している
●住用村の教育委員会が作った村史で、14 集落の様々なことが書いており、私たちは事前調査として使用した。しかし、集落ごとの分類もなく、中身も住民に聞いたままを記録しているため、間違ったところも多い。集落の特徴や出来事の把握に使った上、根拠を示すためには他の文献からも確認する方が良いと思われる。

『平成 25 年度 地域の環境文化に依拠した世界自然遺産のあり方に関する調査検討業務報告書』[鹿児島大学 2014]

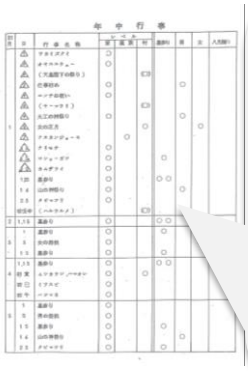
対象範囲：西仲間　特徴：聞き取りのまとめ・マップ
使用方法：マップの参考・聞き取り調査の項目確認
●環境省の岡野隆宏氏が鹿児島大学で特任教授をしていた際、奄美で行った調査をまとめたもの。その中に西仲間がモデル集落として入っており、聞き取り調査やマップ作りなどがある程度できていた。聞き書きは、和田も授業の一環として参加していた。この報告書の中でもっとも役にたったのは、集落マップであり、それを基に実際に集落を歩きながら調査ができた。

跡見学園女子大学民俗文化研究調査会　1977『民俗文化』第 3 号



対象範囲：見里　特徴：社会関係
使用方法：集落の成り立ちを理解するに適している
●跡見学園女子大学の民俗学・文化人類学の共同調査によるもので、見里集落をフィールドにしている。主な調査テーマは社会関係であり、集落の組織や儀礼、年中行事においての社会関係に焦点を当てた報告書になっている。なので、私たちの調査内容とは異なるが、集落に入る前に基本情報として集落の成り立ちを理解するのに活用した。

国際基督教大学　1976『文化人類学調査実習報告書』第 3 輯



対象範囲：市　特徴：空間のシンボル、年中行事
使用方法：他集落との比較・確認に使用
●大学生の実習によるもので、市集落を調査しまとめた報告書である。上記の『民俗文化』のように家族関係や儀礼についても記述しているが、その他にも集落の空間においてのシンボルや年中行事について分かりやすく説明しており、この文献の表を利用して他集落との比較調査に活用した。

---

[2] 参考資料リスト

②	聞き取り・集落歩き調査(1～2 か月)
作業	資料からピックアップした情報から質問項目を作成し、それを中心に聞き取り調査を行なう。または、実際に集落を歩きながら案内してもらい魅力だと思った点や疑問に思った点などをチェックしたり、詳しく聞き取りを行なったり文献で確認したりと①②の作業をくり返す。根拠がわからなければ博物館の学芸員や研究者に確認する。
成果	歴史的背景や地域での暮らしについての情報や知識が無いと、どのような質問をすれば良いのか、どこまで深く掘り下げて聞いていいのかと最初は途方に暮れていた。その一方で、初めて聞く言葉や風習や地名ばかりで、何度集落歩きや聞き取りをしても驚きや感心ばかりだった。この部分が「よそもの」の視点から感じる魅力の発見につながった。調査対象の地域だけでなく他地域についても知っておくと、地域で聞いた内容がその周辺で共通するものなのか、或は調査対象の地域だけのものなのかが判断できる。比較によって、調査集落の特徴や魅力が見えてきた。
課題	ヤムラランドの会員や青年団とともにこうした作業ができたらよかったが、私たち自身の知識も経験も足りず声掛けまでする余裕がなかった。今回で一緒に作業ができていたら他の集落でも同じ手法を使って調査をする人がでてきたかもしれない。また、こうしたことは興味がある人無い人が分かれるので、できる人でできる範囲のことをする基本のスタンスで、さらに興味が無い人でも面白く参加しやすい内容でイベントとして調査を進めるような工夫が必要だ。

③	集落歩きマップの作成(3～4 か月)
作業	まずは「ゼンリン」や「Google map」などで集落周辺と集落中心部の地図を用意し、そこにある施設や神社や泉など「見てわかる」スポットを地図におとす。さらに聞き取りや集落歩き調査でわかったことをこの地図に書き込む。この時点で集落の資料の一部にもなる。それだけではなく集落歩きマップとして完成させる場合、見やすさや分かりやすさや面白さを重視するために、テーマを絞ったり簡単な説明に直したりイラストで表現したりと工夫が必要である。様々な地域のガイドブックやコンセプトマップがネット上で公開されているので、用途に応じて参考にしたい。地図にどんな情報を載せ、どんなデザインにするかは、ガイドや集落の人に確認するべきである。
成果	＊三集落の「集落歩き」用のマップを作成した。[3] ＊マップの作成手順をまとめた。[4] ＊市集落マップは「イチフラ　モニターバスツアー」で、見里集落マップは「エコツーリズム推進協議会　集落歩き」で試用した。
課題	集落の形態や周辺の地形によって、載せる地図の範囲を決めるのが難しい。プライバシーの関係もあるので、マップを配ったり置いたりする場所や機会は限定したい。マップの裏や周りなどに、住用へのアクセスや概要や体験プログラムをまとめて載せたものが作れたらなお良い。

[3]集落歩きマップ

[4]マップ作成手順

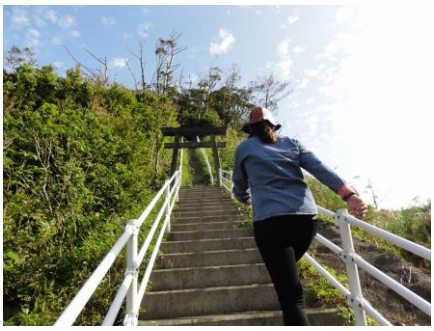
④	モニターツアーの企画・実施(1～2 か月)
作業	ひととおりの調査を経ると地域の魅力が浮かび上がってくる。例えばそこにしかない伝統漁法や伝統の踊り、また地形や植物に見られる豊かな自然など、通文化的に貴重なものは観光の対象になりやすいため、ソフト面における観光開発の目玉になる。こうした目玉を活かすとツアーを組みやすい。参考に他のバスツアーやモニターツアーに参加してみると発見があって良い。
成果	今回企画・実施した「イチフラ　モニターバスツアー」は、事業で対象としている三集落のうち、市集落で作業を比較的多く行っていたので市集落を選んだ。あまみシマ博覧会やヤムラランドや奄美市の事業などのプログラムで、まだ組んだことのない体験として「市集落歩き」「ソーラ突き」「つるクラフト」「古民家でお茶菓子休憩」「さとうきびしぼり」を実施した。アンケートやふりかえり等で満足度や反省点がわかり今後の観光プログラム造成に十分活かすことができると思う。[5]
課題	観光産業化に際して、現在実施しているプログラムの人数や回数、レパートリーは必ずしも充分とは言えない。NPO・市・住民の意識と体制を一度に整えるのは難しいが、一丸となってとりくむべき内容であるし、その時期にある。例えば「ソーラ突きを広め隊」「島料理勉強会」「古民家再生プロジェクト」のように、内容がわかりやすく参加しやすいものを媒体にするなどして、ゆるやかなチームで地道に作業を進めていく必要がある。

5-11　イチフラポスター・チラシ・台本・アンケート・ふりかえり

※ ヤムラランド活性化促進企画として、「イチピク（市集落を中心にピクニックしよう）」を開催した。

ヤムラランド会員が、もう一度初心の楽しい活動を思い起こすためにピクニックを企画したところに、私たちがより充実したものにできるよう中身を企てたので紹介する。

イチピク(11/30)	
作業	山間～市・青久の間にある神社や自然の観光スポットになりそうなところを中心にまわった。案内人は主に山下茂一氏、与島義満氏で、参加者は 17 名程度だった。最初にチーム分けをし、全部まわり終わったところでワークショップを行なった。ワークショップ内容は５つのグループに分かれて当日のコースのスポットの観光面でのふりかえりを行った。①危険度②面白度③新鮮度④つまらない度⑤もっと知りたい度で分かれ、グループごとに３つずつそれに対応するスポット・理由・解決策を挙げてもらった。[6]
成果	15 名ほどのヤムラランド会員が参加し、改めて地域の資源を見直すことができた。市～山間のエリアの主要スポットの現場の確認と、改善点などを挙げることができた。
課題	今回は、本来「ただ楽しむため」のつもりで企画していたのを、私たちが内容を濃くしすぎて、負担をかけてしまったように思う。今後も、会員が楽しむようなこういった活動から活発化していければよい。



12-13　イチピク配付資料・まとめ

●その他、様々な体験や活動を行ってきたのでいくつか写真で挙げる。

Facebook 広報ページ運営

ヤムラランド定例会参加

奄美の寅さん聞き取り調査参加

南部大島むらの魅力現地調査参加

八月踊り練習参加

結ノ島 CAMP　西仲間・見里集落踊りに参加

ラジオ出演

など

ヤムラランド定例会参加

奄美の寅さん聞き取り調査参加

ラジオ出演

南部大島むらの魅力現地調査参加

八月踊り練習参加

Facebook広報

４．今後の展開

（１）運営体制

今回の事業は半年間であり、その中でできたこと、できなかったことがあった。できたことは上記の報告にあるとおりで、できなかったことはヤムラランドの活動の活性化、根本的な体制を整えることであった。平成 29 年度の完成を目処に、住用におけるハード面の観光設備の整備が進められている。その一方で、観光のソフト面を担っている「NPO 法人すみようヤムラランド」は、活動が縮小しつつあるのに加え実動メンバーの減少や事務局と理事長の交代予定などもあり、今後の展開がどのようになるかは断言できない。しかし、インターン生・和田の半年間の延長が決定しているので、これまでの経験を活かして転換期におけるサポートや活動の提案など率先して行っていきたい。

（２）文化調査

この半年で中心的に調査した三集落、西仲間・見里・市集落では、そのリーダーとなる３人が各集落についての詳しい調査を独自に行なっていた。集落史を作りたいというほど熱意をもっていらっしゃるが、私たちの課題として観光に活かすということ、半年という時間の制限があることで、そこまで深い調査やまとめができなかった。昔の事をよく知っている物知りの方が元気なうちに、このような調査は「今」すぐにでもやるべきことなので、ヤムラランドの活動として私からも鹿児島大学生の研修や聞き書きを活かして推進していきたい。

（３）観光開発

最初の内は潜在的な観光資源を色んな角度から照らし、「お試し」のイベントやツアーをやれる範囲でどんどん仕掛けていくべきではないか。その上でこそ様々な意見を収集し工夫を重ね、適切なターゲットやコンセプトや値段を定めたり、多様なプログラムを組んだりできるはずだ。まずは少しずつでも住用の「いいところ」を発信することから始まるように思う。例えば、観光に関わるアクティビティの紹介だけでなく、住用の特徴や文化などを簡単に知ってもらえるような web ページを作成する、住用に行きたくなるようなパンフレットや動画を作るなどである。あと半年でこつこつ取り組んでいきたい。

５．半年を終えて

和田

最初はどのように動けばいいか、誰に何を聞いたらいいか、どこまで動けばいいのか、全くわからないところからスタートしました。様々な方からアドバイスをもらいながら、最後まで迷いながらもこの半年を終えたように思います。

私がこの半年で感じたことは、大きく４点あります。一つ目は、奄美の文化は知れば知るほど奥が深いということ。知るほどに複雑で多様性に富んでいる奄美の歴史や文化は、興味が絶えることはないし勉強も追いつきませんでした。だからこそ調査も不十分で、観光にも活かしきれなかったように思いますが、それではもったいないというほど魅力のある島だということは確信しました。二つ目は、「住用、いいところだなあ」。自然が豊かであることはもちろんですが、どうしてここまでしてくれるのか、というくらい気にかけてお世話をしてくださった方がたくさんいらっしゃったことが特に印象深いです。たくあんある地域の中でこの住用町を深く知れたことを嬉しく思います。三つ目は、自分の思いと相手の思いの違いです。同じ地域でも同じ組織でも一枚岩というわけではなく、話の持ち込み方やアプローチも直球では思い通りにいかないのが当たり前で、それをいかに工夫して努力して思いを同じくするのかを学びました。この部分は比較的似たもの同士が多い学生の時には学べないことの一つだと思います。最後に四つ目は、ヨソモノの役割の大切さです。もちろん最初は地域の人間関係や問題や文化・歴史的背景を知らないけれど、しがらみや偏見がなく、ヨソモノだからこそ見えるもの、言えることがたくさんあったと半年が経って改めて思います。「この人にだったら何でも相談できる」と思ってもらえるような関係をよりたくさんの人と築くことが重要だと思いました。

この事業は市役所が大学生を「地域おこし」要員として採用する前例のないものであったため、今後の参考になるよう「できれば」こうであったらいいなという要望を示します。

《まず始めに、採用部署において》

① 取り組もうとする内容について詳しい人から資料を渡すか説明をすること。

② どんな課題があり、誰がどこまで動いており、何をしてほしいのかを再度確認すること。

③ 誰と、どのような枠組みの中で作業するのかを明確にすること。

④ すぐにいつでも相談できる環境をつくること、それを伝えること。

《作業において》

① 報告会・報告書や今後のためにも、できる限り作業を記録させること。

② 作業の内容と範囲が期間や予算に対して適切か確認すること。

以上です。本当に貴重な体験をさせていただき、微力ながら地域に貢献できたことは、この事業のおかげであり、些細なことまで面倒を見てくださった市役所の関係職員にお礼を申し上げます。ありがとうございました。私はおかげさまであと半年延長させていただきますので、今年度後期採用枠の分まで、これまでの半年を活かして頑張ります。

宋

あっという間に半年が経ち、第一回の「知の地域おこし連携事業」(が)幕を閉じました。この半年間を振り(返って)みると、様々な出来事があり、すごく充実した日々を過ごした気がします。この事業で感じたとは数えきれないぐらいですが、その中でいくつかをお話したいと思います。

なによりも奄美が、住用がもっと好きになりました。私は元々奄美に関する研究をしており、だいぶ前から奄美に来てましたが、やっと奄美を、住用を深く理解ようになった気がします。もちろん、まだ勉強不足ではありますが、知ることで理解し、理解することでもっと好きになった気がします。かけがえのない人々にもたくさん出会いました。今までこんなに地域の人々と触れ合ったことはありません。留学生であり、完全なよそものである私をここまでやさしく、娘や孫みたいに接してくれるとは思いもしませんでした。こんな私を支えてくださった皆さんに本当に感謝しています。

そして、この事業を通して自分ができること、できないことが分かるようになりました。自分の力では解決できないこともいっぱいありましたが、素敵なパートナーの和田と一緒に今まで頑張って乗り越えることができたと思います。また、福長さん、中村さん、清さん、大谷さん、私たちの相談に乗ってくださってありがとうございます。他にもいろんなアドバイスをしてくださった関係者の皆様にも感謝いたします。

まだまだ未熟ですが、今後ちゃんとした社会人になるように、そしていずれは奄美に役に立つように頑張りたいと思います。ありがとうございました。